

令和6年度第1回 市民活動・ボランティアサポートセンター運営会議 会議録

日 時 令和6年5月31日（金） 14：00～15：20

場 所 姫路市市民会館 5階 第11会議室

出席者 委員7名 事務局5名

（委員） 藤本 真里 座長 米谷 啓和 委員 三宅 靖子 委員
大西 麻衣子 委員 中安 学 委員 八田 友和 委員
本上 聖子 委員

（事務局） 市民参画部 岸本部長 市民活動推進課 門口 課長
市民活動・ボランティアサポートセンター 岸本 所長 吉田 係長 杉尾 主事

次 第

1 開 会

2 議 事

- （1）令和5年度 事業報告について
- （2）令和6年度 事業計画について
 - ・ボランティアスタンプラリーについて
 - ・アンケートの実施について

報 告

その他報告事項

3 閉 会

会議の進行記録（要点記録）

事務局： 資料に沿って説明

- （１）令和５年度 事業報告について
- （２）令和６年度 事業計画について

座 長： それでは、皆さんからご意見をいただきたい。

構成員： 昨年度は SNS を活用されたようだが、私も登録して情報を受け取っていた。細やかでタイムリーに情報発信されているなど感心していた。受動的に入ってくる情報だけでなく、積極的に情報を収集して発信されていたので、それもなかなか大変だったろうと思う。

座 長： デジタルスタンプラリーについて、タイトルが良くないと思う。私が勤務する博物館でも人集めによく使う手法で、子供向けには効果的だと思うが、この企画のターゲットは大学生や若い方ではないか。その層がボランティアに行って活動してきたという証明に使うツールになるならば、もう少し固いイメージのタイトルにした方が良いと思う。学生もスタンプを集めたいというよりはそれを就職などの証明に使いたいのではないか。証明を見る大学の先生や企業の方から見ると、スタンプラリーというと遊びのような印象を受ける。例えば、「ボランティア活動認証」といったような、見る側が納得するようなタイトルにしてはどうか。

事務局： 現在、チラシを作成中で、タイトルも考えているところだが、できるだけキャッチーでその目的が分かるようなタイトルにしたいと考えている。

座 長： これは、活動先で団体が認めるというような流れなのか？

事務局： 各団体に QR コードを配布して、活動された方がその QR コードを読み込むことでスタンプが付与される。スタンプを集めたのち、活動履歴証明書の発行になるが、その様式はかわいいデザインもあるが企業にも提出できるようなまじめなデザインもある。企業に提出される場合はそういうデザインを選んでもらえばしっかり活動しているなという印象を持っていただけたらと思う。

座 長： QR コードを出す団体側も、スタンプラリーが目的ではなく活動を証明するという認識を持っているということか。若い子が来ることで簡単にスタンプをあげるということにならないように、説明が必要だ。

事務局： 団体にはその説明を添えて QR コードを送る。

構成員： この企画は、ボランティアをする人の間口を広げるという目的もあると思うので、学生が「面白そう」「やってみよう」と思わせる要素も必要だ。一方で証明書を見て企業側がなるほどと思わせる要素も必要で、難しいとは思いますがその両方を兼ね備えたタイトルを考えていただきたい。

構成員： アンケートについて、感想になるが、Q6 の人材確保についての設問は、大事な項目だと思う。団体の方々がどういう答えをされるのか大変興味深い。社会福祉協議会も社協支部の活動を支援しており、団体の方々の活動や悩みなど共通する部分が多いので、結果をしっかりと見せていただきたいと思う。

座 長： 最近の市民活動の風潮として、市民活動を始める方々は団体や会社に属するのではなく、例えば環境問題など自分自身が関心のあることを対象に自由に活動している人が多いという印象がある。センターは基本的に登録している団体や個人ボランティアの方を対象に支援しているので、行政につなげるような場合も登録が必要になってくる。そうではなく、登録しなくても支援できるような仕組みがあっても良いのではないかなと思う。いろいろな活動をセンターがコーディネートすることで、市のあちこちで活動がつながったり広がったりするようなそういう展開があってもよいのではないかな。

構成員： 先週、シンガポールに行く機会があり、現地の様子を見ることができたのだが、DX が大変進んでおり、買い物でも地下鉄などの交通でもスマホがあれば完結する。市民活動に参加することもでき、そういったツールを利用して行政は的確な情報を発信しているのだなと感じた。将来的に、センターのデジタルスタンプラリーがそういう形になればよいと思った。学生の方だと活動証明がもらえるというメリットがあるのはわかるが、一般の方にはどういうメリットがあるのか。

事務局： 補足になるが、紙の活動履歴証明書については、市長名で市長印を押した形で発行する。年配の方だと、自身の活動した内容が、市長名と市長印で証明してもらえんということを喜んで下さる方も多いのではと考えている。また、小さい子どもさん向けにかわいいデザインも用意している。スタンプラリー単独で何かというよりは、活動する中でこういったツールがモチベーションの1つになり、活動を継続していただく1つのきっかけになれば良いと考えている。

構成員： 活動の履歴が残るのは良いと思う。自身の活動の履歴を残すことで、以前参加し

た団体はどこだったかなというデータベースになるし、センターにとってもデータベースになりうる。自治会活動にもつなげていきたいと思った。たとえば地域の活動でウォークラリーや輪投げ大会などの運営をやることがあるので、そういったボランティアな自身の活動が履歴やマップになるということのも楽しそう。自身のアイデンティティになっていきそうな可能性も出てくる。予算もついているということであれば、スタンプラリーの2つくらい先に進めてデジタルを使った市民活動ツールとして活用したい。

座 長： どの団体の活動に参加したのかと自身の活動を思い出したいときもあるので、活動日記のような役割も果たす。

事務局： ラジオ体操のように、ボランティアに参加してハンコを押してもらって、手帳にする。活動の履歴を残すことがモチベーションにつながるのではないかというご意見を、以前この運営会議の中でいただいた。それをベースにこのデジタルスタンプラリーを企画した。

構成員： 3年から5年くらいのスパンの、デジタルを使ったボラサポの事業というのを描けたらよい。

事務局： 長期のスパンを描けると良いのだが、今年度は1年目なので、進めていきながらユーザーの反応や機能追加などを検討していきたい。

構成員： これは姫路市のアプリ、「ひめパス」を使ってするということだが、デジタルスタンプラリーの機能も加わってバージョンアップされるということか。

事務局： 「ひめパス」のメニューの1つに加わる。

構成員： そうなると、今年1年目の運用をしていく中で2年目以降の目標など新しい展開が見えてくるのではないかと思います。それから、これは余談になるが、この「ひめパス」、自動でログアウトされる間隔が短いように思う。私の母も利用しているが、一度ログインしてからログアウトされるまでの時間が高齢者にとっては短い。セキュリティの関係でそういう仕様になっているのかもしれないが、一度確認していただきたい。

事務局： そういったご意見を是非教えていただきたい。担当者に伝える。

座 長： デジタルスタンプラリーというタイトルだと活動記録だと思わないので、対象に響くようなネーミングをしてほしい。御朱印帳のようなイメージで、自身の活動を振り返れるようなものが良い。いろんな可能性があるので、継続しながら展開していけると良いと思う。

構成員： DX と言われる中で、「市民活動と DX」というと、今行っている市民活動に DX を取り入れると考えがちなのだが、そうではなくデジタルができる可能性を市民活動に活かすという発想の転換が必要だということを知った。何でもデジタルに置き換えると手間やコストがかかるが、そうではなく例えばラインや 아이폰 など昔はなかったが普及してきたツールを取り込んでいくことが大事なのだと思う。例えば、講座を選ぶとき主催が公民館の講座でも、センターの講座でも、総合センターの講座でも市民にとっては同じ講座。今まではアナログで制限があったため縦割りだったが、このデジタルを使うことで一元化できる。シンガポールのようにスマホ一つで世界がつながってどこにでも行けるというような仕組みができることを期待する。

座 長： 姫路市は公園を活用して、いろいろなデータを集めているのではないかな。

構成員： たしかに様々なデータを集積して活用している。姫路市の緑化率を可視化したり、公園に対する住民の要望を聞くなど、市の中では公園は進んでいる。公園愛護会など市民活動もあるので、枠組みを外して何かつながりがあると良いと思う。

座 長： 市の中でも他部署とつながるというのは良いと思う。ある活動に興味を持ってセンターに来られた方に、他にも市役所の中でどんな活動があるということを伝えてつなげていけると良い。またそれぞれの部署で同じような事業をしている場合にどちらかに統合させるなど、情報を共有することで無駄をもなくすこともできる。

構成員： 兵庫県立大学の地域創造機構は公園と絡んでいるので、そことつながるとまた展開が広がりそうだ。

座 長： 地域創造機構とは私もかわりがある。その中心的存在の先生にセンターの話をしたことがあり、何か絡むとおもしろいよと伝えたら、センターが何をしたいのか明確なビジョンがあれば応援するということだった。今、センターはいろいろな事業をしているので、学生とこれをしたいという話をするのでいいかなと思っている。

事務局： その他報告事項として、センター登録団体の「＃ひめじでごみひろい」と、本会議のメンバーが所属されるクラーク記念高等学校姫路キャンパスの生徒さんたちのコラボでごみひろい活動をされたので、ご報告いただきたい。

構成員： 毎年、3月になると3年生が自由登校期間になり、1、2年生も時間ができるのでボランティア活動を何かしたいという話が出て、センターに相談した。いくつかの団体を紹介いただいた中で、「＃ひめじでごみひろい」と、コラボすることになった。いろいろと学校の都合に合わせてくださり、メンバーの皆さんもとても親しみやすい方ばかりで学生もすぐに心を開いて活動することができた。また、活動中には姫路市立白鷺小中学校の生徒さんや PTA の方々と交流する場面もあり、横のつながりができたという印象もあるので、大変良い機会をいただいたと思う。さきほどのデジタルスタンプラリーの話に戻るが、本校でボランティア活動をしようとする、その団体は本当に大丈夫なのか？という意見が年配の教員から出る。どの学校もそうだと思うが、年に数件は生徒や卒業生がトラブルに巻き込まれたという警察からの連絡があるので、年配の教員は心配になるのだと思う。

座 長： 巻き込まれるというのは、学生が市民活動グループのトラブルに巻き込まれるということか。

構成員： ボランティア活動を継続するうちに、その人間関係で良くない人物とつながってしまい、警察に補導されるというケースがある。

座 長： そういう人間や危険を見極める力を身に着けていってほしいところではある。

事務局： 石川県七尾市の災害ボランティアセンターへの派遣について、姫路市社協さんにご報告いただきたい。

構成員： 私は4月の5日～11日までの派遣で、移動日を除くと実質5日間、現地調査班の業務に携わった。ボランティアの依頼を受けてから、再度 TEL してアポどりしてから改めて下見に行き、必要なボランティアの人数や作業時間、必要な軽トラの台数などの見積もりをしてくる。そしてその情報を入力するという作業を担っていた。災害ボランティアセンターとしては、そのあとボランティアをしたい方を受付し、来てほしい方とのマッチングを行い、送り出してから無事に戻られるまでをサポートするというものだ。七尾市が特殊だった点は、廃棄物の分別が非常に厳しい点で、市の仮置き場に持ち込んでも受け付けてもらえず、仮の仮の置

き場という集積所が設けられていた。私が派遣された時期は、1日あたり40件くらいは下見に行くという目標が定められていたが、当時はボランティア活動として受けられる作業の範囲が狭く、住んでいる家屋の片付けはOKだが物置や納屋はだめといった線引きがあったため、ボランティアの依頼自体が少なくなっていた。また、高齢化率の高い地域だったので、こちらからの連絡に対応してもらえないことが多く、最終的にはアポどりできないままに現地に訪問して、会えたらそこで調整して、会えなかったら訪問メモをポストに入れるという対応をした。しかし、今は納屋の片付けなども手伝うという方針に変わり、ボランティア要請がかなり増えたということで、6月に姫路市社協からボランティアバスを出すことになっている。また、災害ボランティアセンターではアプリも取り入れ、ボランティアのマッチング調整にキントーン、トランシーバー機能のバディコムというアプリを活用していた。ただ、どうしてもブルーシートを屋根に貼るとかブロック塀をはつるなどの専門的な技術を要する依頼はできる方が限られるため調整が難しい状況だった。実際活動をする中で感じたことがいくつかある。まず、ボランティアのニーズの掘り起こしが難しかったこと。やってほしいという依頼はあるものの、できることが限られているため、断らざるを得ない状況で立腹される方も少なくなかった。また、地域性もあるのかと思うが、助けてほしいと言えない人が多いという印象がある。現地に出向いて、実際に片付けをしている人に声をかけても間に合っていると答える方が多かった。姫路で災害ボランティアセンターが立ち上がったときは、依頼があった時点で、ある程度人数など見積もって調整していかなければいけないなと思ったし、また、廃棄物の処理についても難しいところではあるが、その状況に応じて分別すべき時期、できない時期を判断して変化させていく必要があると感じた。社協としては、普段からボランティアをしたり支援をしている方に対する応援に重きをおいていたが、これからは助けてもらうこと、支えてもらうことも大事で助けられ上手になるということも伝えていく必要があるのではと感じた。

座 長： 姫路市ではどうか。普段からの知り合いならボランティアも受け入れるが、全国から知らない方が来るとなると抵抗があるのだろうか。

構成員： 現地では知らない顔だということで不審がられたし、実際にボランティア活動がされた方からも警戒されたという話を聞いた。

座 長： トランシーバーは通じにくいところもあり、不便なものもあるが、バディコムならばネット環境がよければ使えるという点、非常に使いやすそうだ。

構成員： バディコムについては、先だって障害がある方々が姫路城に観光に来られた際に介助者として対応した際に利用したが、非常に便利で使いやすく、いい訓練になった。

構成員： 学生達にも災害時の看護を教えているが、実際の現場の話を聞かせてもらえて非常に参考になった。日本の風土や文化の中では人に迷惑をかけてはいけないという意識が強くなりがちだが、若い学生のうちからそれを変えていいということを伝える必要があると感じた。スタンプラリーの件も、学生目線になるが、活動したという承認を得られる機能が若い方たちにアピールできると良いのではと思った。市民活動やボランティア活動が知る人ぞ知るというのではなく、幅広い世代に意識が高まるようにこの事業も広まればよいと思う。

座 長： このスタンプラリーの話を聞いたとき、ターゲットは学生だと思った。この世代が就職など自分のアイデンティティを示すためのツールとして活用してもらうことで、人材のすそ野を広げていくということにつながっている。ネット上で簡単に認証されるという点も学生にとっていいのかもしれない。これをどのように周知するかが課題で、近隣の大学にポスターを掲示したり、チラシを配架して告知していくのも良いのではないか。学生の場合、誰かが始めると口コミで広がることも多い。

構成員： さきほど意見が出たが、ニュースでも若者が闇バイトに巻き込まれるといった話もよく見る。その団体の活動が本当にボランティアなのかという精査も課題だと思う。

座 長： その点、このスタンプラリーの対象はセンターが主催する事業で、活動実績のある団体をターゲットに募集をかけてメニューを作っているので安心だ。その部分を学生に周知すると良い。

構成員： さきほど申し上げた障がい者の姫路城観光の介助に、姫路市内の学校にボランティアの依頼をしたところ、姫路商業高校、姫路獨協大学など多くの学生の方が協力してくれた。やはり、学校側も姫路市社協という看板があるので安心して学生を参加させて、先生方も引率でご協力くださったのだと思う。

座 長： 紙やネットだけでなく、Face to Face で依頼することも大切だ。

構成員： 姫路獨協大学には地域連携室という部署があるので、ぜひ声をかけてほしい。

座 長： 皆さんからの情報提供で大変有意義な話を聞くことができた。では、今回の会議はこれで終了としたい。